論文の和文要旨

論文題目	ラオス中部ラオ・トゥンのラム歌唱の民族誌： グローバル状況下にみる五感統合とデジタル化をめぐる身体感覚の現在
氏　名	平　田　晶　子

本論文は、ワールドミュージックの世界音楽市場に流通するモーラム音楽において、その存在を充分に指摘されてこなかったラオ・トゥンのラム歌謡に注目し、（１）ラム歌謡の音楽家たちにとってエスニシティというアインデンティティの取捨選択が、経済活動の一環として営まれる音楽活動のなかでどのように行われているか、（２）また感覚人類学的アプローチを伏線に置き、ラオ・トゥンがいかに感覚を活かした音楽的経験をしているか、そして（３）グローバル状況下におけるデジタル化（またはオンライン化）の力と伝統文化の維持とのせめぎ合いのなかで人間の身体的経験とはいかなるものであるかを明らかにすることを目的とする。

本論文は３部構成で、全８章で構成される。第１部「グローバル状況下における在来音楽の民族誌的記述に向けて」では、理論的枠組みと問題意識、研究目的に加え、民族誌調査の背景を提示した。

既存の伝統音楽とエスニシティに関する先行研究は、音楽とアイデンティティを不可分の関係として扱い、音楽はエスニック・アイデンティティの維持や形成に重要であることを指摘するなど、双方が相互的関係であることを議論の中心に据えてきた［Trimillos 1986、Nagel 1994、Stokes 1997］。但し、在来音楽の演じ手にとってエスニック・アイデンティティの形成に音楽が不可欠であるという捉え方は、本質主義的なアプローチに転じることとなり、時代錯誤的な印象を与えかねない。他方で、本質主義に対し、手段／道具主義（instrumentalism）は、経済活動の手段としてエスニシティを政治的に組織化してきたことや、民族が経済的に利益を生みだすときに手段的に選択されてしまうことに焦点を当てる［Cohen 1969: 198-201 、Glazer and Moynihan 1963］。こうした手段／道具主義は、音楽的行為が行われる文脈において、ある集団が利害関心に基づいて合理的かつ手段的に民族という概念を選択する際、在来音楽の担い手の音楽的行為を考察する際に一考に値するといえる。個人が、自己のエスニシティを、他者との関係において交渉することで、個人にいかなる経済的／社会的利益がもたらされるかを明示することができるからである。

但し、在来音楽を歌うことや奏でるある一つの民族集団が、ある特定の目的遂行の手段であると描くだけでは、その音楽社会を極めて孤立したものとして扱う危険性が出てしまう。そこで博士論文では、近年の人類学におけるエスニシティ論において、対象の社会を一枚岩的なものとして捉え、周辺の民族集団との相互作用を無視したかたちで研究や分析を行うことに対する研究者が作り出すエスニシティの虚構に対する批判の声を掬い取ることにした［cf 飯島 1990：248］。例えば後の境界論に影響を与えたエドモンド・リーチの動態論的アプローチは、エスニシティの変化を踏まえた動態分析に対する重要性の高まりを促していった［cf 長谷川 1998: 623、Leach 1954］。境界論を提唱したフレドリック・バルトは、他者の存在があって自己のアイデンティティが決定される、また他者との境界を作り出しながら、差異化を図る人間の行動を関係論的文脈に応じて変化していくものだと主張する［Leach 1954、1969］。

他方で、エスニシティの状況論や動態論の学識的出自は異なるが、東南アジアのタイ・カダイ系のタイ・ルーを研究対象としたモアマンは、国民国家形成期と重なる 1956～1961 年までタイ北部に暮らすタイ・ルーの村落社会でフィールドワークを行い、「ルー」という民族名称的なラベルがタイ国という国家的文脈のなかで状況に応じて選択された結果による自己表出の一形態であるとして、他者との相互関係や社会的文脈によってはタイ人、北部タイ人（コン・ムアン）という異なった自己呈示の選択肢が併存していることの意義を詳細に検討し、のちのタイ・ルー研究の発展に大きく寄与してきた［Moerman 1965、長谷川 1998、馬場 1998］。その後、モアマンは自身の論文のタイトルでもある「誰がルーか？」という問い立てを自ら否定し、「いつ、どのように、そしてなぜルーというアイデンティティが好まれるか（prefered）」と問い直しを図る、認識人類学的エスニシティ論を展開している［Moerman 1974］。周辺民族との交流をしながらも、人類学用語でいうところの「伝播」や「文化借用」と表現し得る、現地語で表現される「他者模倣」を繰り返しながら同化していく少数派が、果たして民族ラベルが高い優先順位を付与されるはどうしてなのか。博士論文は、その機能論的発想を下敷きとして、状況の重要性（the importance of the situation）と対他関係のなかに浮かび上がる自己の存在という視点を絶えず持ちながら、現地の人びと自身の身体の内部に備わった「民族識別装置（ethnic identification device）」の働きを重視していった［Moerman 1974: 62］。

このような認識人類学的アプローチに基づくエスニシティ論を在来音楽研究に応用させ、多民族混住の地において在来音楽を奏でる人びとの営為を記述してきた文化人類学者・馬場雄司による、1990 年代以降の国境を越えた地域開発の政治的・社会的文脈に焦点を当てた、民族というアイデンティティの認識装置として機能する側面を強調する民族誌などは、博士論文の問題意識を補強する先行研究として位置づけた［馬場 2019,2018］。また、機能論的に音楽や踊りを扱うトーマス・トゥリノの民族誌を紐解くと、音楽や踊りは、移民の感情を放出させ、コミュニティ・アイデンティティを醸成する機能をもつという視点も重視すべき点である［Turino&James 2004, Turino 2008］。

さらに仏領インドシナを経験した対象フィールドであるラオスの在来音楽の経験を理解するために本論文は、ライティング・カルチャー以降のフェルドによる後期研究と比較素材とした。フェルドは、ベイトソンの生成分裂の概念を敷衍させ、ポスト植民地主義にみる不平等・経済的状況の原因や社会的不安、西洋と非西洋の音楽的表現の不平等な実践に着目し、そこで奏でられる音自体が、ある種の分裂を引き起こし、何らかの社会関係を生成することを描きだしている［Feld 1996, 2000］。そこで本論文は、グローバル化や商業化の波が押し迫る在来音楽の経験を正確に捉えるために、ラオ・トゥンのラム歌謡の担い手たちが音楽的行為のなかでエスニシティとどのように交渉を図り、個人にいかなる経済的／社会的利益をもたらしながら、ある種の分裂を引き起こし、また社会関係を生成しているかを考察した。

一方で、対象のラオ・トゥンのラム歌謡は、オーストロアジア語族カトゥ語派ソーの人びとが彼らの生活世界で歌い紡いできた歌唱文化であるものの、既存のモーラム研究およびラム歌謡研究において、その存在を十分に指摘されることなく、等閑視されてきた。ソーは、既存の山地民研究で平地国家を築く支配者側の低地ラオに対し、山腹や丘陵に暮らし、非識字社会で生きてきた山地民（山地ラオ／山腹ラオ）としても位置づけることができ、周辺に暮らすラオやプータイなどの近隣住民との対峙的関係によってブルー・ソー、ソー・マコン、カー・ソーなど複数の自称を使い分ける。しかし、ソーは、ジェームズ・スコットのゾミア論で描かれた平地国家の統治に抗う術を身につけて生きる山地民像とは異なり、その真逆の生き方を選択してきた人びとであり、むしろ仏領インドシナの植民地支配からの完全な独立を目指した国家統合の過程で、彼ら自身のエスニシティを変化させながら生き抜くための術を巧みに操り、低地ラオが牽引するモーラム音楽産業社会に柔軟に適応してきた。こうしたソーの巧みな芸能戦略において鍵となるのは、カトゥイック語派の下位集団間のリンガフランカとして用いられる「ブルー語」の音の特徴と、「ブルー語」で歌われるラム・クロンニョの旋律で創り出されるラム歌謡世界の理解である。以上が、序章でまとめた理論枠組みと研究対象をめぐる問題関心である。

序章に続く第２章は、民族誌的探究の背景を記述することで、第３章以降の議論に向けて布石を打つ章である。第１節では、サワンナケート県の地理的・歴史的変遷とソーの調査村の形成史を概観し、第２節以降はラムの担い手たちが暮らす多民族混住地を特徴とする調査村の形成史、エスニシティ、言語環境、生業、宗教状況について、県の地方史に関する文献資料やフィールドワークで収集した一次資料を用いながら整理した。この作業を通じて、対象のラオ・トゥンのラム歌謡の担い手たちは、中央政府が推し進める緩やかな同化政策や法規制が整備される状況下で立ち現れる国家権力、階級、複数のエスニシティ、宗教と、ローカルにみる伝統文化とがせめぎあうアリーナで芸能・宗教活動を行っていることが明らかとなった。

極めてトランスナショナルな状況下で在来音楽を歌い続ける山地ラオのラム歌謡をめぐる身体的経験に対する理解を深めるために、本論文では、欧米の人類学が牽引してきた

認識世界の民族誌的探求と感覚人類学の理論枠に引き寄せ［Howes1991, 2003, 2005、Classen1994, 1996、Ingold 2000］、言語中心主義の影響を受けた人文社会科学史を批判的に捉えつつ、音と旋律に加え、五感を通じた感覚的な身体的経験の多様性を重視する民族誌を目指した。また本論文は、デジタル化（またはオンライン化）に直面する人間の身体的経験を理解する上で、五感統合の身体意識の重要性に関する議論［小松 2005, 2013］を参照しつつ、「経験的身体（empirical body）―後天的に経験したことで得てきた知識や情報、イメージなどを重視する身体―」という概念を提唱し、ソーの身体的経験の理解への道筋を作った。これに呼応した議論部分は、本論文の第２部である。具体的に、第２部「五感統合の軸―伝統文化の維持」は、村落社会に生きるソーの人びとの芸能・宗教実践を記述し、音や旋律を中心としながらも、嗅覚や触覚や味覚を効果的に相互作用させた感覚間相互作用が引き起こされる、身体的経験を例証した。

第３章では、山地ラオのラム歌謡の担い手が、低地ラオと出会いながらも、彼ら自身のラム歌謡世界と低地ラオが築いてきたモーラム歌謡の音楽産業社会および上座仏教社会に与していることを概観した。特に熟練したソーのラム歌謡の名手は、聴き手がラオであろうが、ラオ・トゥンであろうが、オーストロアジア語族の言語特有の巻き舌音（歯茎たたき音）や低地ラオのラオス語に翻訳不可能な表現を効果的に使い、複数の旋律を組み合わせながら歌い続けている。心を突き動かされた聴き手の心的な表れを考えると、そこにはギアーツの云う「原初的紐帯」［Geertz 1973］のようなものがあるのではないかと考えることができる。ただし、原初的紐帯を形成する「所与」のものとは、必ずしも本質的に一対一に対応するものではない。ソーの事例からみると、ラム歌謡の名手は、本来の出自と職業上の芸能者としての自己を切り離し、現行センサスの民族分類で公認されているカタン、マコンと彼ら自身を表象することの方がより経済的利益を生み出すと判断すれば、柔軟に対応している。またソーの歌い手は、高度な操作が行われる芸能戦略を目指し、低地ラオおよび山地ラオの双方の共同体を縦横断することさえもできる。在来の歌をめぐる共同体と感情の関係をみることで、在来音楽とエスニック・アイデンティティは、絶えず対となった関係ではなく、極めて選択的に言語移行が可能であり、ラオ・トゥン独自の身体が身につけている五感を装置として機能させ、共同体のバウンダリーを超え、バウンダリーを紡ぎ出している。

続いて第４章は、少数民族の音楽と感情の問題について、既存研究が指向してきたエスニック・アイデンティティの形成に不可欠なものとして結論づけるのではなく、ソーの人びとのラム歌謡の身体的経験が、親族関係の強化につながる社会関係について議論した。第４章は、在来の音楽芸能の文脈から民間治療の文脈へと設定を変えることになるが、そこで紡がれるのはラムの旋律であることに変わりはない。ソーのラムの担い手は、民間治療儀礼で用いる言語やラムの旋律に加えて供物も組み合わせ、複数の感覚器が刺激し合う身体的経験をしていた。そうしたソーの人びとのラム歌謡の身体的経験とは、彼ら自身の祖先崇拝をめぐる記憶や感情を同時に醸成するものであり、彼ら自身の祖先や帰属へ

の深い感情を強化するものである。

第５章は、ラム歌謡と感情の関係を更に掘り下げ、ソーの人びとが、仏教化が進む状況下で在来のラム歌謡の旋律を奏でながら、音や旋律だけではなく、視覚や味覚や触覚を刺激する物質を取り込んだソー独自の祖先崇拝を維持するための創造的な調整行為に注目した。第２部の最終章でもある第６章では、ソーの音楽的行為のなかでも最多数の旋律を奏でる精霊儀礼を事例に取り上げ、本来彼ら自身の身体に備わる五感統合を有効的に活用する身体的経験を検討した。具体的には、言語、旋律、供物だけではなく、草花や玩具なども、ソーの人びとの世界で紡がれるラム歌謡の音楽的行為を構成する要素として付置し直し、人間の五感資源の統合―視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚―を有効活用したラム歌謡の音楽的行為を愉しむための仕掛けを分解し、再構築を試みた。

第２部に対し、第３部「五感分断の軸－デジタル化と身体感覚」では、オンライン状況下にみるソーの在来音楽をめぐる身体的経験が、先にも述べた経験的身体が現存することによって機能していることが分かるように対置させた。第７章は、第６章まで議論してきた村落社会における文脈から離れ、ソーの人びとの在来音楽がグローバルミュージックの音楽市場へと参画するための商品化の過程で一つの流通経路を作り出しているオンライン化という文脈から考察を図った。商品化は、人びとの音楽の視聴形態を大きく変えてきた。ソーの人びとだけではなく、世界中のラオ・ディアスポラは、在来音楽配信のオンライン化を通じて、ラム・クロンニョの旋律を含めたラオ・トゥンのラム歌謡をどこにいてもディスプレイ越しにあるオンライン・コミュニティにて鑑賞することができるようになっていた。第７章第２節以降は、在来音楽の商品化やオンライン・コミュニティ上で流通するラム・クロンニョの旋律を視聴するファンやキュレーターの存在に着目した。そこで明らかとなったことは、彼らのラム歌謡の鑑賞行為にみる身体的経験が、以前の経験を通じて培ってきた知識や情報を重んじる経験的身体の現存によって、つながりを求め合い、共鳴し合い、エスニシティではなく、ラム歌謡コミュニティの生成へと発展させる働きを秘めていることであった。オンライン・コミュニティにおけるラオ・トゥンのラム歌謡へのコメントの書き手の反応に共通していたのは、かつての古き良きラオの伝統的慣習を希求する伝統回顧主義であり、またタイ国内にはいない民族や言語を物珍しそうに鑑賞している珍物主義であった。このとき、オンライン・コミュニティ上で浮き彫りとなるエスニシティは、もはや民族というアイデンティティを核に形成されているものではなく、画面越しの視聴覚情報－音や旋律、風景、家屋、食材など―を受け取りながら、既に身体に備わっている五感を装置とし、音楽を愉しみ、緩やかにつながりを求めるラム歌謡コミュニティ―またはラム歌謡愛好家の社会集団―と呼ぶことができるだろう。